

「生き残りへ 智略縦横 真田三代」(第二回)

講師 一龍斎貞花

大河ドラマ「真田丸」 期待出来るスタート。一寸どうかと思える滑稽があります、皆さんの考えは如何。

武田家終焉、岩櫃城から始まって、幸村の祖父幸隆が関東管領上杉家から武田家へ、そして三男昌幸を武田家へ人質として送ったのが、主を転々と代えた起点。以後織田―北条―徳川―上杉―信之徳川、幸村豊臣と、中小が生き残るための読みがあります。

武田を滅ぼした織田が手柄を立てた部将にそれぞれ領地を与え、真田は関東の責任者となった滝川一益の配下になったため、折角手に入れた沼田城は滝川儀太夫が城主に。昌幸は、たちにおのれの牧場で育てた葦毛の駿馬を信長に献上。ぬかりがありません。ところが、武田滅亡からわずか半年

後、明智光秀の謀反によって信長が亡くなり大混乱。一益は、凡れの領地伊勢長島へ帰るべく、「厩橋は北条殿に、沼田城は真田殿に返還いたす」

沼田が戻ってくると昌幸大喜び。北条が「沼田は元々我が城」と、いい張ったが、「真田から受取ったので真田へ返すのが筋」と、一益は却下。「信長が討たれたので、滝川め伊勢へ逃げ帰るのだ、よしこの機に」と北条、三万五千の軍勢で滝川軍を翻弄。

一益大敗を喫し信州へ。昌幸は一益の首を北条へ差し出そうかとも思ったが、「イヤ筋をたがえるは小者のすること、味方からも見くびられ人の信義を失うことになる」と、手勢を率いて「北条の手の及ばぬ和田峠まで、ご先導致す」「敗軍の我等をご先導下さるこ

と誠にかたじけない、真田殿は利にさとい輩と陰口を叩く者があるが、この恩は生涯忘れぬぞ」「なんの沼田城をお戻し下された、ご恩返しでござる」

一益は大敗を喫したため、織田の後継者を決める重臣会議に出席出来ませんでした。柴田勝家に味方して豊臣秀吉に敗北。滅亡後一益の孫一積は真田を頼り、昌幸の五女と結婚しています。北条―徳川―上杉へ

昌幸は、沼田を争った北条の配下となる一方で、弟信尹を徳川へ人質に。織田が去った後、上野・信濃・甲斐は空白地帯。北条と徳川が甲斐で対陣。家康はまだ浜松時代ですが、昌幸は持ち前の鋭い嗅覚で徳川有利とみて、今後は北条から徳川へ。「おのれ、真田め」

と北条氏政は激怒。

しかし甲斐での戦線が徳川有利となるや氏政は、家康と和議を結び、北条が占領した信濃の佐久郡と、甲斐の都留郡を徳川へ。徳川は、沼田城を北条へ譲渡し、さらに娘督姫を氏直に嫁がせる政略結婚。

「沼田は、わが真田が実力で勝ち取った城、それを勝手に北条へ渡せとは。家康は信玄の使者として会見した時から好かぬ男と思っていた。むざむざ城を渡してなるものか」

城明け渡しを迫る北条に、「沼田は真田の城、欲しくば弓矢にものをいわせて取るがよからう」 宣戦布告、北条に攻められたが、頑強に抵抗。

一方越後の上杉は、信濃が徳川の領土となったと知るや、川中島へ攻め込

んでくる恐れがある。信玄亡き後武田から奪った海津城だけでは心許無い、真田の領地に面した虚空蔵山に城を築こうと直江兼統の指図で最前線に普請にかかった。

「よし、それならば我等も対抗するまでよ」

領内を検分して廻り、ここぞと上田盆地のほぼ中央、尼ヶ淵・千曲川が大きく蛇行して淵を作り、北側が断崖、その川岸の岡に城を築けば、千曲川が自然の要害になる。東には神川が流れ、西側から北側にかけて足場の悪い沼や湿地帯。後年幸村が建てた真田丸も同様の地形の場所です。

「徳川殿、このままでは信濃は上杉に奪われます。防ぐためには城が必要、上田に築きたいのですが、資金も兵力もありません。何卒城造りにご助力を賜りますよう」

防いでくれるならメリットがあると、「尤なり」と家康は金と、上杉の妨害を防ぐための兵を送って参ります。

昌幸は、信玄の奥近習を勤めていた時、軍師山本勘助から城造りについて学んでいます。勘助は海津城を築城。

上田の築城は進み、本丸、二の丸、三の丸の周囲には大狭間、鉄砲狭間を備えた土塀を巡らし、要所要所に大小の櫓を配置、知恵をしぼり大軍が攻めてきても小勢で反撃し、城を守ることが出来るよう工夫をこらし、曲輪はわざと無防備とし敵を引き入れ、一挙に殲滅する仕掛けをほどこした。

幸村は、猿飛佐助と共に山伏の行者道を利用して、近隣諸国を巡り自ら情勢を把握。

家康は、北条との同盟を緊密にするため、沼田城を一向に明け渡さぬ昌幸に、「吾妻郡と利根郡を北条に渡せ」と厳命。

「冗談じゃない。上野は徳川から貰ったものではない。我等自身の力で勝ち取ったもの、手放してなるものか。よし、それ程までに言うならば敵の敵は味方ということもある。上杉と手を結ぶまよ」

ただちに上杉と同盟を画策。これに對し景勝は、

「真田は、武田、織田、北条、徳川とわずかの間に何度も主を代えておる、うかつには信用出来ぬ」

しかし兼統が、「使い方によっては面白うござります。真田の申し入れを受け入れ、徳川の心胆を寒からしめるのも面白いかと」同盟を押し進め、条件は真田の本領安堵と上田築城に、資金と人を遣わすという、今度は上杉が金を出してくれる好条件。引き換えに徳川と断絶し上杉に恭順し、幸村を越後へ人質として差し出すこと。

「よいか幸村、直江殿の力量、上杉流の兵法、よく学んで参れ」

猿飛佐助、根津甚八、海野六郎、望月六郎ち子飼いの忍びの者を従え越後へ。なんと兼統自ら城下まで出迎えてくれ、人質というより客人扱い、春日山の行動も自由。兼統と幸村はお互いを認めあい、意気投合していったのでございます。

浜松の家康は、「おのれ昌幸め、金と兵を出して城造りに協力してやったのに、思い知らせてくれん」

時なるかな天正十三年（二五八五）七月、鳥居元忠、平岩親吉、大久保忠世等徳川譜代の勇將に、諏訪・小笠原・保科等信濃の同盟軍総軍合して七千余の軍勢にて出陣。

「フッフ、来おったか」砥石城に長男信幸を、出城には一門の家来を配し、徳川来たれと待ち構える昌幸。だが総軍合してわずか二千。

「殿、上杉は参りましようか」

「必ず来てくれる、それに戦は兵の数でするものではない。心配致すな、これまでも大軍を向うに廻して戦い抜いてきたではないか」

危機に臨んでもトップは冷静沈着であること、そして不安を取り除いてやるのが大切です。

人質の幸村に、直江からの呼び出し「その方、供廻りを連れて上田へ行け」

「エッ、某は人質でござる」

「殿が、上田へ駆けつけ父や兄を助けよと申されておるのじゃ、異を唱える者もあるがなんのための同盟ぞ。救いを求める者のために尽すのが上杉の義じや」勿論兼統の考え。

「直江殿…」義の大切さ、人を信ずる大切さを学んだ幸村。

いよいよ徳川の軍を向うに廻し、小よく大を制し、天下に真田の力をしめした上田城の戦い、次回のお楽しみに。ポポポポ